

宮武外骨と昭和戦前期の古写真アーカイブ ——明治新聞雑誌文庫と『公私月報』を中心に——

Miyatake Gaikotsu and Old-Photographs Archives in Prewar Showa Period

緒川 直人

Naoto OGAWA

はじめに

関東大震災後から昭和初期にかけては、古書業界に明治文化物の商品市場が形成された時期である¹。その時代、外骨が東京帝国大学法学部教授吉野作造らと競い、古書肆・古書即売会で古新聞・古雑誌を渉猟し、その蓄積がやがて明治文化研究の礎を築いた、という逸話は巷間よく知られる通りである。同時代を見聞きした古書肆弘文荘主反町茂雄が、外骨と古書業界の関係について、それまで古新聞・古雑誌の書価は絶無であったが、「この人をあてに、相当な値を呼ぶ」ことになったと証言したことは、そうした逸話の一つである²。

外骨研究の焦点は、操觚者時代の反骨精神に富む前半生と矯激な言説、社会的タブーや明治文化を扱う出版人・民間学者としての足跡、明治文化研究会や東京帝国大学法学部附属明治新聞雑誌文庫（以下、明治文庫）への関与に定められてきた³。ところが稀代の蒐集家とされる外骨について、上記のごとき伝説的な蒐集譚が取沙汰される反面、蒐集活動の実態は木本至の労作『評傳宮武外骨』を除けば、いささか概説的な記述に終始している。その点と関連して、外骨の蒐集活動が明治文庫という本邦初の明治史料アーカイブの形成や運営と如何に関わっていくのかについては⁴、詳細な専論を見出せない。

外骨の蒐集活動は古新聞・古雑誌の渉猟が注目されてきた。だが明治文庫初代事務主任としての外骨の蒐集対象は多岐にわたり、特に古写真の蒐集には力を注いでいた。蒐集成果は、在任中の公私に

1 反町茂雄「商品としての明治物の成長史」同『蒐書家 業界 業界人』八木書店、1984年。

2 前掲反町『蒐書家 業界 業界人』、286頁。

3 木本至『評傳宮武外骨』社会思想社、1984年、吉野孝雄『宮武外骨—民権へのこだわり』吉川弘文館、2000年、堅田剛『明治文化研究会と明治憲法』御茶ノ水書房、2008年、吉野孝雄『宮武外骨伝』河出書房新社、2012年（初出1980）。

4 明治文庫の設立経緯は、前掲吉野『宮武外骨伝』第八章「東天紅」等に詳しい。

わたる購入・取得品の広報誌『公私月報』で社会に公開され、所蔵する古写真の情報が共有されるアーカイブ的な仕組みが講じられた。また『公私月報』を通覧すると、公開された古写真や史料情報の共有を出発点に、同好者との新たなコミュニケーションが創発／反復され、人々のつながりや史料認識を再生産させていく媒介機能が観察できる（後述）。

以上の問題意識を踏まえ、本稿は、昭和戦前期の「古写真アーカイブ」としての明治文庫の形成と、アーカイブを結節点とする利用者とのコミュニケーションの創発／再生産などの社会的機能について、同文庫事務主任宮武外骨による史料蒐集・保存公開活動と、広報誌『公私月報』の役割に注目して歴史社会学的に検証する。アーカイブ／データベースと利用者との関係性は、歴史学系のアーカイブ論・史料論では見逃されがちな論点である⁵。

そもそも、アーカイブとは（１）記録資料（群）、（２）記録を管掌する機関、（３）記録の資料庫を指す語彙である⁶。ただし、アーカイブは社会的な利用公開が保証され、記録・情報が共有されることで存在意義を持つものだから、アーカイブ論にはそうした視点が必要なのは言を俟たない。と同時に、水島久光が提議する「循環をつくり出す装置としてのアーカイブ」の視点は注目に値する⁷。水島は、アーカイブの重要な機能として、出来事・記録の追体験や想起による認識の共同性の獲得という「循環」に開かれていることを強調する。アーカイブと社会の接点を重視するこのメディア論的な視点は、『公私月報』が内包する媒介機能と重なるものである。

本稿は、アーカイブと社会の関係性を論ずべく、史料群の蒐集実践の社会過程、史料群の社会的公開・共有の措置、循環装置としてのアーカイブの各視点をふまえた、歴史社会学的なアーカイブ史論の事例研究である。

1 宮武外骨・明治文庫・『公私月報』

外骨と明治文庫や『公私月報』については、吉野孝雄『宮武外骨—民権へのこだわり』、同『宮武外骨伝』、西田長寿『「公私月報」について』に詳しい。以下、まずは両氏の仕事を参照して外骨の来歴と同文庫・同誌の概要を確認したい。

1-1 操觚者としての宮武外骨

外骨（幼名亀四郎）は慶應三年（1867）に讃岐国阿野郡羽床村の里正の子として生を享けた。1878年（明治11）に高松栄義塾、1881年（明治14）に上京して新文学舎で学ぶなか、『团团珍聞』『驥尾団子』等の諷刺雑誌、『近時評論』『朝野新聞』等の民権派新聞雑誌を耽読し、操觚者（ジャーナリス

5 後藤真「利用状況調査とフィードバック」後藤・田中正流・師茂樹編『情報歴史学入門』金壽堂出版、2009年、147～148頁。

6 青山英幸『アーカイブズとアーカイバルサイエンス』岩田書院、2004年、ii 頁。

7 水島久光「アーカイブ時代の地域と放送—地域イメージの環流／コミュニケーションの再生—」『放送メディア研究』7号、2010年3月、212～215頁。

ト)の道にすすむ⁸。1886年(明治19)創刊『屁茶無苦新聞』、1887年(明治20)創刊『頓智協会雑誌』、1901年(明治34)創刊『滑稽新聞』等の外骨が発行した新聞雑誌には、権力への反骨精神を基調に、政治・社会の墮落や腐敗を諷刺・諧謔・激語で撃つパロディ／告発ジャーナリズムの趣向が強い⁹。その結果、筆禍入獄4回4年余、罰金刑15回、発行停止・発禁処分14回を数えた。

外骨は精力的な出版活動も行っている。自身の来歴や関心事と重複する社会的タブーや明治文化関連の著作が多い。前者には『猥褻風俗史』(1911)、『筆禍史』(1911)等、後者には『明治演説史』(1925)、『明治密偵史』(1926)、『アリンソ国字彙』(1929)等がある¹⁰。『筆禍史』「自跋」には、被差別部落の子供を友達とした外骨が、己の先祖が備中の被差別民であるらしいという憶測を載せており¹¹、部落差別への感受性が察せられる点で興味深い。

1-2 明治文庫と『公私月報』

1923年(大正12)9月1日の関東大震災による帝都灰燼は、喪われた明治への懷古趣味と史料散逸の危惧を生じさせた。そのいずれに重心を置くかの温度差はさておき、一部の大学人と民間学者が結集し、翌年11月、東京帝大法学部教授吉野作造を会長に、明治史料の保存・研究を目的とする明治文化研究会が創立された。創立同人は、吉野、井上和雄、外骨、石井研堂、小野秀雄、尾佐竹猛、石川巖、藤井甚太郎で、会誌『新旧時代』の発行と毎月十一日の例会報告を柱に、明治史料研究と蒐集保存活動を行った。

明治文庫は、明治文化研究会の理念を母胎に派生した機関である。同文庫の創設に次の経緯があったからである。1927年(昭和2)2月2日、博報堂創立者瀬木博尚が出資した寄附金15万円で東京帝大法学部にて明治文庫が創設された。博報堂創業三十五周年記念事業について瀬木から旧知の外骨に打診があり、外骨が明治期新聞・雑誌の「保存庫」の設立を発案し、東京帝大法学部教授吉野、同穂積重遠、同中田薫に諮問した上で実現に漕ぎつけた¹²。史料保存を志す明治文化研究会員の意向も踏まえた提議であった。かくて本邦初の明治史料アーカイブは、民間学の土壌から芽生えて、アカデミズムの一隅に根を張ったのである。創設当初の同文庫は第一高等学校本館三階に仮寓したが、1929年(昭和4)12月に史料編纂所半地下の鉄筋コンクリート造り防火扉付き七十坪余に移転する¹³。

1927年2月28日、文庫初代事務主任に外骨が就任し、1949年(昭和24)9月の退職日まで明治史料の蒐集と整理業務に挺身する。外骨は「東京帝国大学」と大書されたリュックを背負い、山高帽に着物姿、ステッキのいでたちで、東北から関西地方に史料渉獵の行脚を続ける¹⁴。そして、蒐集物の死

8 前掲吉野『宮武外骨』、18～19頁、同「宮武外骨年譜」前掲吉野『宮武外骨伝』、362～363頁。

9 前掲吉野『宮武外骨』、6～10頁。

10 前掲吉野『宮武外骨』、176～177頁。

11 前掲吉野『宮武外骨伝』、222～223頁。

12 前掲吉野『宮武外骨』、163～164頁。

13 西田長寿「『公私月報』について」宮武外骨編『公私月報』巖南堂、1981年、復刻版、2頁。

14 前掲吉野『宮武外骨伝』、325頁。

蔵を嫌う外骨が(後述)、渉獵の成果と文庫運営の徒然を記した雑誌が『公私月報』であった。同誌は文庫の広報誌的な役割を担うメディアと考えてよい。

『公私月報』は1930年(昭和5)10月の創刊号から1940年(昭和15)3月の廃刊迄に109号を発行した。明治文庫の取得状況・史料書誌・史論を紹介した雑誌で、挿絵や活字以外の文字を文庫職員蛭原八郎が担当した以外、記事・構成・写真等はすべて外骨の仕事である¹⁵。雑誌の基本組は、一頁三段組、一段は九ポ二十三字詰三十四行の書式である。雑誌の基本構成は、一頁に「本人の主張と新聞雑誌についての史論欄」、二頁に「珍重すべき稀品」欄・寄附品情報・取得史料紹介・「特別記事」、三頁以下は外骨の業務や動向を摘記した「公私混合日記」や新聞雑誌・関係者についての考証であった。同誌発行部数は300部、読者数は東京帝大関係者や明治文化研究会員を中心に230人前後とされる¹⁶。

2 宮武外骨の古写真蒐集と人脈

明治文庫の中心業務が明治期新聞雑誌の蒐集保存であるため、必然的に『公私月報』には新聞雑誌の紹介記事が多い。そこから、同文庫を明治期新聞雑誌アーカイブというイメージで描きやすいが、それだけではない。『公私月報』を通覧すると、同誌には古写真蒐集・紹介の記事が相当数確認できる。写真史研究やメディア史研究では見逃されやすいが、昭和戦前期の明治文庫は、古写真史料アーカイブの一面も有していたのではないかと考証していきたい。

2-1 購入——古書肆・紙屑屋・即売会の渉獵——

『公私月報』によれば、外骨の古写真蒐集は「購入」と「借用複写・譲渡」の二系統に区別できる。主な購入先は、古書肆と古書目録、紙屑問屋、古書即売会(百貨店系・古書肆系)である。関東大震災後の明治ブームを背景に、古書業界では明治文化物の商品市場が登場し、明治物専門古書肆の簇生と同時に、明治文化物のサブ・ジャンルとして「古写真・写真古書」市場も胎動していた¹⁷。明治文化研究会も、会誌『新旧時代』に「明治物の古本相場」記事を折々に掲載して市場動向や品揃えに留意していた¹⁸。外骨の蒐集を支えた背景には、そのような昭和初期特有の社会制度の変容と環境が存在していた。

古書肆のなかでも、神田神保町の一誠堂と神奈川県横浜市の天保堂とは大口取引となった。前者は1938年(昭和13)9月26日、蒐集家林若樹旧蔵の「〔従明治六年到明治十五年一月成就、松井総兵衛源延昌、蔵〕と表書せる古い桐箱に入れた写真六百枚と、外に二百五十枚を一括とせる古写真を高価に購入した」一件である¹⁹。『公私月報』95号の「古珍写真八百五十枚」記事によれば、東京の名所旧

15 前掲西田「『公私月報』について」、3頁。以下特に断りがない限り、『公私月報』の書誌は同論文に拠る。

16 前掲西田「『公私月報』について」末尾に、西田が記憶する限りの送付該当者が示されている。

17 緒川直人「昭和戦前期の古書業界と「古写真市場」の胎動—古書肆荒木伊兵衛・巖松堂と蒐集家上田貞治郎を事例に—」『ジャーナリズム&メディア』6号、2013年3月。

18 「明治物の古本相場」『新旧時代』1巻6号、1925年8月。

蹟と全国名所が700枚、顕官・美人が100枚余で、「最も珍とすべき明治十年頃の吉原各大楼の外構、遠くは松前の港、長崎出島の和蘭商館、備前岡山のバンガローもちりの萬可楼といへる異風建築など枚挙に遑なし」逸品揃いであった。松井は日本橋蠣殻町の砂糖掛物卸売商近江屋主人で、『一名わが身の要真衛生秘訣』等の著作もある文人である。後者の詳細は不明だが、1938年12月4日に横浜市天保堂で「古珍写真百二十枚」を購入し、外骨が「意外の獲物であつた」と満足した一件である²⁰。

古書肆での蒐集が、つねに首尾よく達せられたわけではない。特に、不特定多数が閲覧する古書目録での渉猟はむづかしい。伊勢松坂の中田書店目録の顛末はその一例である。1937年（昭和12）8月27日、外骨は「中田書店から来た古書目録に「高畠式部女の九十六歳写真うらに自筆歌あり頗る珍品五円」とあつたので、他の数品と共に注文したが、其写真は先客にとられてダメ²¹」であった。昭和十年代になると、地方の古書肆でも古写真が客の競合をよぶ商品となっていた事実がわかる。外骨は中田書店の目録は気に留めていた模様で、1938年10月、中田書店に明治6、7年頃の「度会県庁役人の写真」を注文、入手した²²。しかし、「古ボケで顔の目鼻も見えないボンヤリしたものであつた」ため返品している。

紙の廃棄物が集まる紙屑問屋も有望な蒐集場所である。1933年（昭和8）8月14日、外骨は、元自由党員で衆議院議員・静岡新報社主幹を歴任した江間俊一（1860～1933）の関係文書数万点が、遺族により日暮里の紙屑問屋に売却された報に接した²³。外骨は、約百五十貫の文書類を一貫目35銭で買取り、助手二人と一週間を費やして選分け作業をおこなう。伊藤博文や小川平吉ら政界名士の来翰の他、外骨が珍重したのは、1890年代初頭に流行した名刺に貼付する印紙形の小写真である。東京芝日影町の山本写真館が1ダース1円80銭で請負う宣伝文と一緒に、江間宛に送付した見本2点の現物である。それを単なる「珍品」としてのみならず、「写真史料の一であり」と語りなおす態度に、外骨が蒐集写真を最終的にいかなる位相で捉えようとしていたのかの片鱗をうかがえるだろう。

古写真蒐集の大きな便宜となったのは、一箇所に複数の古書肆が出店する古書即売会である。外骨は、白木屋主催の三都連合古書即売会（1934年6月1日）、京橋の第一相互館で開催の烏合会古書展覧即売会（1936年9月28日）、大阪松坂屋主催の古書展覧即売会（1936年12月10日）、銀座松坂屋主催の古書展覧即売会（1939年1月19日）、神田駿河台下の東京図書倶楽部で開催の東京古典連盟古本即売会（1939年1月24日）で、古写真を入手する機会を得た。なかでも、1934年（昭和9）6月1日の三都連合古書即売会では、数年来待望の逸品を入手する千載一遇の機会に接した。京都の細川開益堂出品の全眞社発行『写真新聞』10号揃（1879年7～9月）を15円で購入した一件である²⁴。同紙は写

19 宮武外骨「古珍写真八百五十枚」『公私月報』95号、1938年10月、5頁。

20 宮武外骨「公私混合日記（七十）」『公私月報』98号、1938年12月、8頁。

21 宮武外骨「公私混合日記（五十六）」『公私月報』1937年8月、8頁。

22 宮武外骨「アテコミ値の古本類」『公私月報』95号、1938年10月、7頁。

23 宮武外骨「印紙形の小写真」『公私月報』36号、1933年8月、5頁。

24 宮武外骨「珍重すべき珍品（三十八）」『公私月報』46号、1934年6月、2頁。

真専門雑誌の嚆矢の一誌で、毎号2点程の鶏卵紙写真が直接紙面に貼付されていた。同誌の稀観性は業界でも認識されており、明治文庫を過去数度、買上希望者が訪れていた。外骨によれば、「昭和六年六月の頃、藩札蒐集屋前田惇が同じ十冊を持つて来て、明治文庫にこれがないのは恥です、百五十円でお買ひなさいと迫る、馬鹿なことを云ふな、先年三十円でさへ買はなかつたのだイラナイよと拒むと、今はソナナ値じゃありませんが、百二十円にマケますと云ふ、イヤ、マケても欲しくないと断つた」経緯があった。博報堂と帝大法学部を後見に一定の購入予算を持つ外骨の足元をみる者も周辺に出没していたのである。結局、15円で購入できた外骨は、「待てば海路の日和とやら、これで明治文庫の恥もなくなつた」と胸を撫で下ろす。

2-2 借用複写・譲渡——外骨周辺の人脈——

明治文庫の蒐集対象は古写真原物だけに局限されない。古写真を「写真史料の一」と定義する外骨の片言は前述した。1937年に創刊した『明治文化研究会雑誌』創刊号で、外骨は同誌掲載の記事も「複製写真」も、「むしろ研究資料」と理解する姿勢を示す²⁵。それは前述の片言と地続きの構えである。外骨は、研究用途に資するかぎり、古写真原物も複製写真も、「写真史料」として等しく蒐集対象にしたと理解すべきである。複製写真の入手は古書肆ではなく、主に知己からの借用複写によったが、知己の確認は外骨周辺の人脈を浮き彫りにする。図表1は外骨が複製写真・古写真原物の借用・譲渡を受けた人々の一覧である。図表1からは、「元自由民権家」(秋山弥助・伊藤痴遊)、「新聞記者(元民権派系・現役記者)」(小泉三申・宮崎晴瀾・伊藤痴遊・鈴木要吾・上田十郎・篠田敏造)、「明治文化研究会員」(山本秀煌・柳田泉・篠田敏造)、「蒐集家」(三田平凡寺・山中古洞・中川忠三郎・田澤嘉一郎)、「アカデミシャン」(穂積重遠・柳田泉・林茂・信夫清三郎・堀越三郎)、「地方読者」(上田琴三・安井八翠坊)という、外骨の人脈のつながりがみえてくる。外骨自身の経歴をトレースした人脈といえる。

外骨が借覧複写を依頼、あるいは譲渡を受けた写真にはジャンル上の特徴がみられる。まず「芸娼妓」「風景風物」などの風俗・風景分野である。前述『明治文化研究会雑誌』によれば、外骨は「昔と今くらべ」という定点観測的な風景の歴史地理に関心を寄せており²⁶、風景風物写真の蒐集はそうした背景があろう。より顕著な特徴は、「自由民権家・民権派ジャーナリスト」(図表1のNo1～2、4、9～15、17、19、21)の写真が多いことである。この点は後述するが、外骨の古写真蒐集の企図の一端がどの辺にあったのかを知る手がかりである。

この人脈の中で、外骨が写真を入手するには二通りのパターンがあった。第一は、三田平凡寺や山中古洞ら外骨の蒐集事業を理解する知己からの打診である。晩年を迎えた山中の場合は散逸の危惧という事情も重なる。山中は1937年(昭和12)2月中旬に明治文庫を訪れ、「懷中より紙包みを取り出

25 宮武外骨編『明治文化研究会雑誌』1号、1937年、2、27頁。同誌の刊行は1号のみである。

26 宮武外骨「昔と今くらべ」前掲『明治文化研究会雑誌』1号、13頁。

図表 1 複製写真・古写真の提供者（借用・譲渡）一覧

No	年月日	公私月報	名前	肩書	提供写真	貸・譲	備考
1	1931. 6	10号	秋山弥助	元自由民権家・明治文化研究会・大審院判事	大井通明（明治15年頃：『自由党员写真帖』所収）	貸	大井は自由新聞社仮編集長
2	1932. 6. 23	23号	小泉三申	元自由新聞記者・衆議院議員・西園寺公望知己	西園寺公望の横顔（明治元年頃）	貸	小泉三申＝策太郎
3	1933. 5	33号	穂積重遠	東京帝国大学法学部教授・明治文庫管理者	民法起草の三博士（明治28年冬）	貸	穂積陳重・梅謙次郎・富井政章
4	1933. 6	34号	宮崎晴瀾	元自由新聞記者（土佐出身）	民権婆様＝楠瀬きた（大正初期：晩年）	貸	
5	1933. 7. 11	35号	山本秀煌	基督教界の重鎮・明治文化研究会出席者	古い芸妓写真43枚（明治12年7月）	譲	新富座 グラント将軍歓迎劇時
6	1933. 10頃	38号	柳田泉	早稲田大学教授・明治文学研究者・明治文化研究会	鈴木田正雄の複写	貸	鈴木は『読売新聞』創業者
7	1933. 12頃	39号	安井八翠坊	広島県広島市東白鳥町在住の読者	水中の人力車の複写	譲	古い写真館の原板を複写
8	1934. 2頃	42号	鈴木要吾	東京医事新誌記者・蒐集家	F. DA. ローザ（慶應2年）の複写	譲	『日新新事誌』創刊に関与
9	1934. 6頃	46号	秋山弥助	元自由民権家・明治文化研究会・大審院判事	桑野鋭（明治15年頃：『自由党员写真帖』所収）の複写	貸	桑野は自由民権家・評論新聞等記者
10	1934. 9頃	49号	秋山弥助	元自由民権家・明治文化研究会・大審院判事	上田農夫（明治15年頃：『自由党员写真帖』所収）の複写	貸	上田は自由党员・岩手日日新聞等記者
11	1934. 10頃	51号	上田十郎	岩手日報記者・自由党员上田農夫の子息	明治12年の全国県会議長集会の複写	譲	
12	1934. 10頃	51号	小泉琴三	京都在住	山田美妙（明治23年1月下旬・同41年11月）の複写	譲	山田は改進黨新聞記者
13	1934. 11頃	52号	柳田泉	早稲田大学教授・明治文学研究者・明治文化研究会	日本絵入新聞発行当初記念写真（明治18年8月）の複写	譲	同紙記者三品蘭溪所蔵写真の複写
14	1935. 10頃	58号	伊藤痴遊	元自由党员・政友会	自由党员国事犯大赦出獄記念写真（明治22年2月20日）の複写	譲	「明治文庫へ永久保存」
15	1935. 11頃	63号	三田平凡寺	蒐集家（東京市高輪車町）	上田花月（大正9年6月）の複写	貸	上田は『团团珍聞』投書家

16	1936. 3頃	67号	信夫清三郎	政治史家	信夫恕軒（明治41年末）の複写	譲	恕軒は漢文漢詩の大家
17	1936. 11初	74号	秋山弥助	元自由民権家・明治文化研究会・大審院判事	『自由党员写真帖』（明治15年頃）	譲	自由党员大塚伊三郎旧蔵
18	1936. 12頃	76号	篠田鉦造	明治文化研究会	伊藤専三の複写	貸	篠田が未亡人から借用した「マタガリ」
19	1937. 2中	77号	山中古洞	蒐集家	新聞雑誌関係者の写真と絵はがき	譲	「明治末期文壇人写真帖」に集成
20	1937. 5頃	80号	山中古洞	蒐集家	芸娼妓写真帖 1冊（明治15年頃）など	譲	
21	1937. 5頃	80号	林茂	東京帝国大学法学部大学院生（当時）・明治政治史家	民権家植木枝盛肖像写真（明治13年頃）の複写	貸	林が土佐踏査で新発見した写真
22	1938. 11頃	97号	中川忠三郎	古写真蒐集家・医療器械商・京都市二条寺町在住	東京女学館内の衆議院仮議事堂（明治24年以降）、日本橋の円太郎馬車、人形町の友楽館、本郷の順天堂、芝山内の弥生館、品川硝子会社（「最も珍とする」）	貸	「古珍写真を借覧して複写を許されたものである」
23	1939. 1頃	99号	三田平凡寺	蒐集家（東京市高輪車町）	『ファーイースト』（明治5年発行の第3巻数冊分）	貸	三田が龍田清造から借りたもの
24	1939. 2頃	100号	田澤嘉一郎	蒐集家（東京市目黒：73歳）	明治20年頃の大写真（縦9寸横7寸）を10点（横浜神風楼娼妓写真を含む）	譲	
25	1939. 2頃	100号	堀越三郎	東京帝国大学工学部建築史学教授	横浜の大写真33枚（横浜神風楼仮宅写真を含む）	譲	

し」て見せ、「これは新聞雑誌に関係した人々の写真や絵葉書です、文庫へ保存して下さい、ウチへ遺して置いても、ナキアトでは反故にされますから」と打診した²⁷。外骨は、「早速一帖に貼り付けて『明治末期、文壇人写真帖、昭和十二年二月、山中古洞翁寄附』と表書」して明治文庫に架蔵した。第二は、新聞雑誌等に報道・掲載された写真中、外骨が欲する写真の所蔵者に借覧・複写を依頼する

27 宮武外骨「山中古洞翁よりの寄附品」『公私月報』77号、1937年3月、2頁。

ことである。『公私月報』80号掲載の「民権家植木枝盛の写真」は、東京帝大大学院生の政治史家林茂が1937年4月の土佐民権史料調査で同写真を発掘したことを聞いた外骨が、「借りて複製した」ものである²⁸。

3 「古写真アーカイブ」としての明治文庫——共有・公開する志向性——

外骨は、明治文庫に蓄積した古写真類を社会的に公開・共有するアーカイブ構築の志向性を有していた。1938年10月発行『公私月報』95号に載せた、蒐集家林若樹への批評とそれに対する自身の姿勢を示した一対の小文が、そのことを示唆する。外骨は、「古名家の自筆本など奇書珍籍を金にあかして購入」した林が、「一切他人に貸さない事」を墨守したため「全くの死蔵であつた」と批判する²⁹。一方、同年7月の林の逝去直後に売立てられた若樹文庫旧蔵古写真600枚を購入した外骨は、林にあてつけるように、同号で「其中の珍物を徐々に紹介して文庫の余業に多くの古写真があることを示す³⁰」と述べ、積極的に蒐集品の社会的公開・共有の姿勢を明らかにする。いわばアーカイブ宣言である。

それでは、外骨は資料庫としての明治文庫を拠点に、古写真アーカイブをいかに構築しようとしたのか。方法としては、明治文庫での現物公開と、広報誌『公私月報』での誌面紹介である。主な公開・共有の対象としたのは、(1) 史料情報（映像・データ）、(2) 新規取得・購入情報、(3) 伝来情報である。

3-1 明治文庫等での現物公開——訪問者・照会・研究会——

写真史家にとって明治文庫の史料群は無視しえないものであったはずである。仔細は不明だが、長崎の写真史家永見徳太郎は、1932年（昭和7）7月12日に明治文庫を訪ね、「明治元年発行の『崎陽雑報』を入手せし事などの談」を外骨としている。

依頼を断る場合もある。1936年（昭和11）6月4日には都新聞社の亀井臣助記者が明治文庫を訪れ、「明治二十年八月十九日、日蝕皆既の写真及び錦絵を貸して呉れと望まれたが、門外不出と称して拒絶」した³¹。文庫に来訪の上で撮影は許可するが、「明治文庫の蔵品は門外不出の規定³²」のため、文庫外への貸出は断っていた模様である。ところが親しい知己には館外貸出を融通する事例もあり、公開ルールに恣意的な部分も見受けられる。例えば、1939年（昭和14）3月27日、外骨に複製写真を提供したことがある東京医事新誌社記者で蒐集家の鈴木要吾は、「明治の顯官に係のあった古い芸妓の写真」の所蔵有無を照会し、外骨から「十数枚」を借用して「複写」している³³。

28 宮武外骨「民権家植木枝盛の写真」『公私月報』80号、1937年6月、4頁。

29 宮武外骨「林若吉の蔵書売立会」『公私月報』95号、1938年10月、3頁。

30 宮武外骨「古珍写真八五〇枚」前掲『公私月報』95号、5頁。

31 宮武外骨「公私混合日記（四十二）」『公私月報』69号、1936年7月、8頁。

32 宮武外骨「公私混合日記（一二）」『公私月報』37号、1933年10月、8頁。

明治文庫外への貸出は原則禁止だが、外骨は研究会等に鑑定名目で古写真を携行し、仲間内に公開している。1933年7月11日夜、明治文化研究会の例会に「近頃購入した明治二年頃上野彦馬が撮った帯刀結髪の武士の写真などを携え行つて、会衆に鑑定を乞ふたが不明であつた³⁴」。古写真は被写体・撮影者・撮影時期等の基礎的なメタデータが不詳では史料価値はない。蒐集した古写真のメタデータを研究会の智慧を借りつつ十全にする努力からは、外骨のアーカイブ構築の意志が透けてみえよう。

3-2 アーカイブとしての『公私月報』——誌面での公開・共有——

そもそも、資料庫としてのアーカイブは、記録の永久保存に耐える物理的な建造環境が想定される。だが古写真アーカイブの施設が存在しない昭和戦前期にあっては、誌面上で古写真・基礎データ・所蔵情報等を社会に公開する刊行物・資料集は、暫定的ながら、紙媒体のアーカイブ（資料保存装置）の役割を果たすものではなかったか。以下、記録の資料庫というアーカイブ概念を上記のように拡張し、紙媒体のアーカイブとしての『公私月報』の役割を論じる。

『公私月報』は古写真をいかなる形式で誌面公開したのか。一例として、蒐集家の三田平凡寺から借用・複写した古写真の場合をみたい。

1939年2月発行『公私月報』99号の四頁の三段組はほぼ全面に、三田提供の古写真群の特集が組まれた³⁵。外骨が紹介するのは古写真群の伝来情報と史料情報、そして古写真現物である。冒頭と文末に伝来経緯が、「本誌前号に明治五年三月創刊の『博覧新報』といふ珍品購入の事を掲出したに因み、例の平凡寺和尚より当時の博覧会場であつた京都本願寺の写真がある、望みならば見せようかとの通告があつたので、早速貸与を乞ふ旨を返信したに対し、和尚より送付されたのが意外の珍品であつた」、「平凡寺和尚は龍田精三氏より借りて送付されたものである」と提示される。古写真群の伝来事情の説明後、古写真三点を選び、史料情報の説明を続ける。三田提供の古写真群は1870年（明治3）に英国人ブラックが横浜で発行した英字新聞『ファーイースト』の、1872年刊行（第3巻）の数冊に貼付された鶏卵紙写真である。外骨は、同誌が「毎冊紙焼写真六七枚を貼付して説明を加へ、外国人に日本を紹介するための雑誌である」という基礎的な書誌を記し、誌面公開した「博覧会場の本願寺寺門前」「電信工事」「吉原妓楼」の三点の史料情報を解説する。「博覧会場の本願寺寺門前」は、「門の標札に博覧会とあり、其傍に出品目録を並べて売つて居る」という具合である。

誌面には古写真を理解する最低限の伝来情報と史料情報が示され、直接明治文庫を訪れる煩瑣なく、古写真情報の概略を確認できる。メタデータの付与によって、はじめて「モノとしての古写真」は「史料としての古写真」の意味を獲得する。外骨の一連の所作は蒐集品を写真史料に転形するアーカイビングなのである。と同時に、誌面公開は、新規の収蔵品が加わったことを告知する広報機能もあり、実際に文庫で閲覧申請をする場合の事前検索用の手がかりを供する。紙媒体のアーカイブとは

33 宮武外骨「公私混合日記」『公私月報』101号、1939年4月、4頁。

34 宮武外骨「公私混合日記（一二）」前掲『公私月報』37号、8頁。

35 宮武外骨「博覧会場の本願寺門前」『公私月報』99号、1939年2月、4頁。

こうした機能も含意している。

誌面公開する古写真は、「風俗・文化」「芸娼妓」「自由民権家」「明治初期建築」等、操觚者・明治文化研究者としての外骨の興味を惹くものが選ばれやすい（中立的なアーカイブではない）。たとえば、1935年（昭和10）7月発行『公私月報』59号で公開された「小林文七の壮時写真 附浮世絵戯作談」を挙げよう。外骨は、「近頃購入した古写真中に 呈三橋千萬吉君 小林文七 明治二十六年十月二十八日」と裏書したものが一枚あった」と古写真の購入・伝来経緯を示す³⁶。そして像主が「珍しい趣味性の浮世絵蒐集家であつた小林文七」という史料情報を示す。さらに世間一般では無名の小林について、外骨は、彼が、浮世絵業界の「玄人仲間」では「小林モノ」と称される贋作を売る稀代の贋作者であったという挿話（ただし、この真偽は必ずしも定かではなく、外骨の勇み足の感も覚える）を附し、史料情報を補強しようとするのである。

また注目すべきは、この紙媒体のアーカイブが、古写真を蔵する読者との共同の誌面作り、すなわち読者がアーカイブ構築に参加しうる循環的なつながりも有していたことである。1933年12月発行『公私月報』39号では、広島読者から送付された古写真が公開された³⁷。経緯はこうである。外骨が『公私月報』30号に「汽船乗りの旅客を人力車で水中の送迎、これは伊予國今治に於けるサマ」と題した古写真を掲載した。それに対し、広島県広島市東白島町の安井八翠坊が「今治とあるのは西条の誤り、今は此人力車の送迎はないが、大正七八年頃までは行はれて居た、風俗写真として奇なものであるから、古い写真屋に保存されて居る原板によつて焼付けさせた」一枚を送付してきた。ここに、誌面公開が、地方読者の写真館での古原板発掘という新たな実践を媒介すると同時に、史料情報の更新を促がし、アーカイブの質の向上につながるという循環が存在する。アーカイブ構築の市民参加の一例といえよう。

4 古写真アーカイブの機能——蓄積・公開・共有がうながすこと——

こうした古写真の蓄積・公開・共有の反復は何を生じさせたのか。アーカイブを結節点とする様々な経験・関係のありかたを示したい。

4-1 人脈・認識の循環とアーカイブの向上

蒐集品のアーカイビング、特にメタデータの確定には外骨周辺の人脈が力添えしている。1938年11月発行『公私月報』96号には、「神風楼と萬可楼」と題する古写真紹介のページがある。1938年9月末に東京帝大工学部教授堀越三郎（建築史学）から譲渡された「古写真四十枚³⁸」の内の二点の公開である。外骨の懸案は、岡山県の本造洋風2階建の萬可楼写真、特に楼名の意味であった。台紙裏面

36 宮武外骨「小林文七の壮時写真附浮世絵偽作談」『公私月報』59号、1935年8月、4頁。

37 宮武外骨「水中の人力車」『公私月報』39号、1933年12月、7頁。

38 宮武外骨「公私混合日記（六十七）」『公私月報』95号、1938年10月、8頁。

に「岡山京橋西詰萬可楼」とあるだけで素姓は知れない。外骨は「英語の『バンガロウ』のモデル」と察して、自説を確かめるべく周辺の物識りに意見を聞く³⁹。まず木魚仙子にバンガロウ Bungalow の建築様式をたずね、次いで大阪明治文化研究会の福良竹亭子に写真を見せて意見を聞く。その福良は石川欣一にたずねる。各人の意見表明を経て、岡山の『山陽新報』主筆鈴木醇庵の異説もあったが、結局、「萬可楼」は、1～2階建て・ベランダ付き等の条件を持つアメリカ式の小屋である「バンガローを模造してその名を楼名としたもの」という解釈に落着するのである。この一件からは、古写真の共有を結節点に、外骨周辺の人脈のつながりと史料認識が循環していく動態がみてとれる。と同時に、こうした人脈（つながり）の存在が、公開以前の古写真のメタデータ確定に貢献し、アーカイブの質的向上を支える一条件となっていた。

外骨の蒐集事業を仄聞した地方の蒐集家との新たな交流も生まれる。1938年11月8日、京都二条寺町通東入の医療器械商で古写真蒐集家中川忠三郎は、「古写真帖」を外骨に送付し「不明名所の鑑定を乞ふ」依頼をした⁴⁰。外骨が「初めて見る珍写真が多く」、『公私月報』で公開する希望を抱く。外骨は「氏所蔵の古珍写真を借覽して複写を許されたもの」の内、「東京女学館内の衆議院仮議事堂」写真を早速1938年12月発行『公私月報』97号で公開した。1891年（明治24）1月20日の衆議院全焼後、虎ノ門内工部大学校跡を仮議事堂とした時代の衆議院の古写真である。外骨は、中川から、その他に「日本橋の円太郎馬車」「人形町の友楽館」「本郷の順天堂」「芝山内の弥生館」「品川ガラス会社」等の古写真の複写を依頼している。アーカイブの蓄積と公開は、新たなつながりとアーカイブ自体の量的拡大、それに基づくさらなる史料の公開・共有へと循環していく契機を含んでいる。

4-2 「民権家写真アーカイブ」の形成

この循環のなかで蓄積される古写真群には明確な主題も存在する。その一つが、図表2の自由民権家と民権派記者を主題とする「民権家写真アーカイブ」と称しうるカテゴリである。外骨は当初、明治文庫で蒐集する新聞紙を民権期（明治10～20年代初頭）までに限定するつもりであった⁴¹。その方針からも外骨における民権期の重要性が窺える。外骨は直接購入した写真の他、『痴遊雑誌』や『塚原夢舟翁』など閲覧した書籍・雑誌に掲載された民権家写真（図表2のNo15、23等）も、所有者に複写提供を依頼するなどして『公私月報』で公開する。一方、『公私月報』記事の社会的共有が、世間で知られていない民権家写真を読者から提供される呼び水となる循環も見逃せない。典型的な事例が、1933年（昭和8）6月発行『公私月報』34号の「民権婆様の写真」[図表3]の一件である。いささか長い引用だが提供経緯が理解できる好史料である。

本誌前号発行直後、明治二十年代に永く『自由新聞』の主筆であつた宮崎晴瀾翁より「今度の公

39 宮武外骨「神風楼と萬可楼」『公私月報』96号、1938年11月、5頁。

40 宮武外骨「公私混合日記（六十九）」、「衆議院の仮議事堂」『公私月報』97号、1938年12月、5、8頁。

41 前掲吉野『宮武外骨』、171～172頁。

図表2 「民権家写真アーカイブ」

No	民権家名	提供者	号	掲載年月	備考
1	山口俊太（明治15年頃）	秋山弥助	2	1930年 9 月	和歌山出身の自由党员・衆議院議員
2	大井通明（明治15年頃）	秋山弥助	10	1931年 6 月	山形出身の自由新聞社記者
3	戸田欽堂（明治初）	柳田泉	11	1931年 7 月	北辰社員、美濃大垣藩主三男
4	西園寺公望（明治元年）	小泉三申	23	1932年 8 月	東洋自由新聞社主
5	島田三郎（明治40年代）	宮武外骨	25	1932年10月	横浜毎日新聞記者、嚶鳴社員、改進黨員
6	自由党の四名士肖像	宮武外骨	34	1933年 7 月	板垣退助、星亨、河野広中、松田正久
7	楠瀬喜多（民権婆様）	宮崎晴瀾	34	1933年 7 月	土佐出身の女権拡張論者
8	江間俊一	宮武外骨	36	1933年 9 月	静岡出身の代言人、自由党员
9	鈴木田正雄	柳田泉	38	1933年11月	読売新聞・東北自由新聞等の記者
10	改進黨の新聞記者（明治17年）	宮武外骨	43	1934年 4 月	大熊重信、河野敏謙、小野梓、矢野文雄ら17名
11	桑野鋭（明治15年頃）	秋山弥助	46	1934年 7 月	筑後柳川出身の自由党员、評論新聞等記者
12	尾崎行雄（明治22年10月）	宮武外骨	46	1934年 7 月	改進黨員、郵便報知新聞社記者
13	上田農夫（明治15年頃）	秋山弥助	49	1934年10月	岩手県出身の自由党员、県会議長
14	全国県会議長大会（明治12年）	上田十郎	51	1934年12月	上田農夫・田中正造ら
15	自由党国事犯憲法発布大赦出獄記念（明治22年 2 月20日頃）	伊藤痴遊	58	1935年 7 月	大井憲太郎、河野広中、伊藤痴遊、荒川高俊、花香恭次郎ら旧自由党员
16	飯島花月（上田花月：大正 9 年）	三田平凡寺	63	1935年12月	信州上田出身の『团团珍聞』投書家
17	末広鉄腸	宮武外骨	70	1936年 8 月	朝野新聞記者、立憲改進黨員
18	自由党员写真帖（明治15年頃）	秋山弥助	74	1936年11月	明治15年頃の岩手を中心とする長野、東京、神奈川等の民権家写真帖
19	植木枝盛（明治13年頃）	林茂	80	1937年 6 月	土佐出身の自由党员、民権思想家
20	鈴木傳五郎（明治23年）	宮武外骨	82	1937年 8 月	香川県高松出身の民権派雑誌『純民雑誌』社主
21	高梨哲四郎	宮武外骨	93	1938年 7 月	「自由頭」の改進黨員、代言人、沼間守一実弟
22	高梨哲四郎（明治31年）	『明治弁護士列伝』	94	1938年 8 月	短薙頭の高梨哲四郎。『明治弁護士列伝』所収
23	鈴木醇庵（券太郎）	宮武外骨	101	1939年 4 月	嚶鳴雑誌社幹事、東京横浜毎日新聞記者
24	星亨の結髪写真（明治初期）	『塚原夢舟翁』	103	1939年 6 月	自由党幹部、代言人。『塚原夢舟翁』所収

※ 宮武外骨編『公私月報』より作成

私混合日記中にある伊勢桑名の書肆からお買取りになつたといふ『民権家列伝』を借覽させて下さい」との請求「それはおヤスイ事ですが、何が故に其御希望ですか」を訊ねると「アノ列挙されてある人名中に楠瀬喜多といふのがありますが、其楠瀬喜多は民権婆様と呼ばれた私の伯母で

民権婆様の写真

本誌前號發行直後、明治二十年代に永く『自由新聞』の主筆であつた宮崎晴瀾翁より「今度の公私混合日記中にある伊勢桑名の書肆からお買取になつたといふ『民権家列傳』を借覽させて下さい」との請求「それはおヤスイ事です、何が故に其御希望ですか」を訊ねると「アノ列舉されてある人名中に楠瀬喜多といふのがありますが、其楠瀬喜多は民権婆様と呼ばれた私の伯母です、大正の初年まで存命でした、其寫眞を現に私方の佛壇へ納めてあります、明治十三年出版の『民権家列傳』に傳記が出て居ると云ふ事



は知つて居ましたので、先年来古本屋を漁つても品が手に入らないのでしたが、今回図らずもお買取の事を公私月報で知りましたから、早速借覽を願ふのであります」とのこと、予は晴瀾翁が『公私月報』所載の日記までをも精讀されて居る眷顧の深いに感じ入り、喜んでお貸しますと答へ、序でに此方の要望として「其民権婆様の寫眞を此方へお貸し下さいませんか、複寫して明治文庫へ納めます」と付け込み其快諾を得て複寫したのが右の寫眞、現物はキャビネ形の大物、それを四分一ほどの銅板に縮寫せしめたのである、明治初期の民権婆様が大正初年までの

長壽であつた事などは少しも知らなかつたさて、此楠瀬喜多女を何が故に「民権婆様」と呼んだかと云へば、それは當時高知縣廳へ左の如き書面を出した事が、民権論の盛んな時代であつただけに全国各地の諸新聞紙上に掲出されたからである

納税ノ儀ニ付御指令願ノ事

曩日以來税納ノ儀ニ付區務所ヨリ迅キ促シアリタレトモ不服ノ事譯有之ニ付其示シ聞ケニ應スル最モ難ク候ニ付其筋左ニ申上候
私共婦女ノ身分ニ候得共一戸ノ主ニ候上ハ諸般ノ務メ且ツ政府ヨリノ御取扱ヲモ男女同シキ權アルコトハ喋々數言ヲチマササル義ト推シ定メ罷リアリシ處澤ヲ其儀ニ非ラズ區會議員ヲ選ムノ權利モナク加フルニ實印ヲ持ツモ證書保證人ニ立事モ不相成趣コレ最モ尋常ノ戸主ト權利ノ差ヒアルノ多キ處ニ御坐候然ルニ權利ト義務ハ兩立スヘキ道理ナレハ議員ヲ選ムノ權利アレバ税ヲ納ムルノ義務アルハ之レ公ケ均シキ筋合ノ然ラシムル處ニ之レアルナリ然ル處私儀ハ議員ヲ選ムノ權利モナク將タ保證人ニ立ツノ權利モナク然レバ男子ノ戸主ト比レバ權利ヲ蔑サレタルコト最モ甚シ然ルチ税ヲ收ムルノ義務ノミ男女戸主並ノ促シアルハ公ケ均シキ御取扱ト覺ヘス是則チ稅ヲ收ムルノ理ナルチ處フ不服ノ要ニコレアルナリ故ニ區務役所ニ出テ右ノ譯合ヲ陳ヘ述レ共男子ハ兵役ノ義務ヲ負擔スレトモ婦女ハ其義務ヲ負擔セサルニ付爰ニ於テ男女ノ權利異ナルナリト區戸長ヨリ示シ聞ケラレタレトモ是亦服スルニ難キナリ何トナレバ男子ト雖モ徴兵ノ義務ヲ免レバナリ故ニ不服一層勝リ不得止御指令願出候ニ付速ニ御詮議相蒙リ申度私ニ於テハ前々陳アル如ク婦女ハ權利ノナキモノナレバ稅ヲ收ムルノ義務モ亦男子ノ並ニ相盡シ其義務相立可申ニ付男女ノ權利差異ノ有ル無シ斷カニ相分リ候様公ケ平ラカナル御指令相蒙リ申度此段奉願候也

明治十一年九月十六日

土佐國第八大區二小區唐人町
二番地居住士族

楠瀬 喜 太

「民権婆様」と呼ぶよりも「女權擴張論の祖母」と云つた方がよい

図表3 「民権婆様の写真」の紹介ページ

す、大正の初年まで存命でした、其写真を現に私方の仏壇へ納めてあります、明治十三年出版の『民権家列傳』に伝記が出て居ると云ふ事は知つて居ましたので、先年来古本屋を漁つても品が手に入らないのでしたが、今回図らずもお買取の事を公私月報で知りましたから、早速借覽を願ふのであります」とのこと、予は晴瀾翁が『公私月報』所載の日記までをも精讀されて居る眷顧の深いに感じ入り、喜んで貸しますと答へ、序でに此方の要望として「其民権婆様の写真を此方へお貸し下さいませんか、複写して明治文庫へ納めます」と付け込み其快諾を得て複写したのが右の写真、現物はキャビネ形の大物、それを四分の一ほどの銅板に縮寫せしめたのである、明治初期の民権婆様が大正初年までの長壽であつた事などは少しも知らなかつた⁴²

42 宮武外骨「民権婆様の写真」『公私月報』34号、1933年6月、7頁。

しかし「民権家写真アーカイブ」の白眉は、1930年8月の『公私月報』刊行初期から、何度も借覧・公開してきた秋山弥助所蔵「自由党员写真帖」であろう（図表2のNo.1～2、11、13は収録写真の一部）。長野県北佐久郡猿久保村出身の秋山は、青年時代に佐久自由民権運動・大同団結運動に関与し、後に法曹界に身を投じて大審院判事等を歴任する。そのかわり、『南北佐久自由主義者の政治運動記録』（1939年、響文社）等の民権史研究書を著した民間史学者である。昭和初期には東京市外吉祥寺に寓して明治文化研究会に参加した。「自由党员写真帖」は1936年11月上旬、外骨の懇望により秋山から明治文庫に寄贈された。外骨は『公私月報』74号の「秋山弥助氏より自由党员写真帖」記事で、寄贈経緯と史料概要（史料情報と伝来情報）を写真入りで公開し、新規収蔵品を広報・紹介する。

明治十四年十月『自由党会員名簿』一冊を購入したので思出し、本誌に四五名掲出の新聞記者であつた自由党员も加つて居る写真帖、それは秋山氏の珍藏であるが、去日文庫へ来訪された節、右の名簿と共に 自由党盟約 自由党決議録 自由党寄附金規則 自由新聞発行規則（明治十四年十二月）等を同氏に見せ、同じ頃の写真帖をこれに加へて保存すればよいと思ひますが、如何でせうと、おネダリしたら、秋山氏は即座に快諾されたのである 左記二十三名の写真である、枠の上下に氏名と住所を五号活字で印刷、帖の見返しに「大塚伊三郎記念品、昭和二年五月大塚邦弥氏より贈らる」と秋山氏の手書がある、それに「昭和十一年十一月上旬、秋山氏より明治文庫へ寄贈されたり」と附記した

山梨県平民小田切謙明^{ママ} 愛知県士族村上佐一郎 福岡県士族桑野鋭 静岡県平民古郡米策 岩手県士族鶴飼節郎 新潟県平民横山環 茨城県士族奥山三郎 岩手県士族宮杜孝一 山形県平民大井通明 岩手県平民八重樫八十助 東京府平民山川梅次郎 和歌山県士族山口俊太 岐阜県士族斎藤喜佐加 神奈川県平民鎌田喜三 岩手県士族川村誠二郎 長野県平民桃井伊三郎 岩手県士族梅内直曹 岩手県士族伊東圭介 岩手県士族豊川痴疑雄 長野県平民遠藤政次郎 岩手県士族鈴木舍定 岩手県士族上田農夫 岩手県士族布施長成⁴³

外骨の史料紹介記事には、史料内容の情報に留まらず、同写真帖が1927年5月に信州北佐久郡岩村田の自由党员大塚（桃井）伊三郎（1882年8月入党）の嗣子邦弥から、伊三郎の民権家時代の旧同志である秋山に譲渡されたという出処と伝来の情報も明示されている。ここにも紙媒体のアーカイブ構築の意志を観察できる。なお同写真帖には旧蔵者桃井の他に北佐久郡出身の遠藤政次郎の写真も貼付されており、佐久自由党员と岩手県自由党员との関係性を示唆する史料である。

43 宮武外骨「秋山弥助氏より自由党员写真帖」『公私月報』74号、1936年12月、2頁。

4-3 戦前期日本建築史学との接点

新聞雑誌研究を学問として不適切と難じる東京帝大文学部教授姉崎正治や⁴⁴、明治文化研究会を好事家の集いとみて当初距離をおいた日本史家遠山茂樹のように⁴⁵、外骨らの事業は常に好意的に迎えられるばかりではない。他方で明治期メディア文化と外骨の事業に深い理解を示す学者も存在した。その一人が、東京帝大工学部教授の建築史家堀越三郎である。堀越との交流を通じて、外骨のアーカイブ事業は、「建築史料形成」と「建築史研究」といった日本建築史学の構築に環流していく。古建築の写真は建築史学の素材となるからである。

外骨は建築史学に寄与しうる古写真や資料を取得した場合、堀越に一報ないし融通する気を回す。例えば、1934年10月4日、「工学博士堀越三郎先生へ電話で古建築の写真数枚購入の通知をした」ところ、「熱心な先生早速来車」した⁴⁶。それに先立ち、同年5月3日、皇居御造営事務局出仕大迫直助の遺族が、某道具屋に売却した明治期の「皇居御造営事務局の設計図」等一括史料を、明治文化研究会員篠田鉦造と大阪の福良竹亭の寄附金五十円で購入した一件があった⁴⁷。『公私月報』46号の「宮城設計図三百余枚皇居御造営事務局の書類」記事によれば、同史料群は「バラの五束」と「寄席木細工の古箱」から成り、後者には「皇居御造営ノ図画入」と明記され「各城門、お車寄、御学問所、謁見所等を始め宮内省全部、女官化粧室、窓飾り、炬燵便所に至るまでを併せて三百二十余図」と「内匠課諸職工印鑑帳」等の関連書類、「野津大将邸図」等の附属図が含まれる。

以上の経緯を、外骨が5月末の『帝国大学新聞』530号で報知すると、同紙を読んだ堀越が明治文庫を訪れ、「皇居御造営の設計図は新聞雑誌に関係ない物、専門の建築学会へ御譲渡下さいませんか、高価に頂戴します」と提案した。当時の建築学会は明治期建築史料を蒐集しており、同史料群に注目したのである。外骨は購入資金提供者の篠田と相談の上で譲渡を快諾した。建築学会からは、「本学会ニ於テ目下蒐集中ノ明治建築史料ノ為メ貴殿ノ御厚意ニ依リ御譲渡被成下候段奉深謝候」の文面の受領証が外骨に贈られた。外骨は「これで堀越先生始め学会一同は、明治建築資料として最高の貴重品であると満足され、品物も行くべき所へ行つた仕合せである」と文を結んでいる。外骨はアーカイブ事業のなかで建築史学の史料形成を側面から支援したのである。

堀越自身にも、建築／風景古写真が建築史学の「建築史料」たりうる直観があったのであろう⁴⁸。外骨が1937年に『明治文化研究会雑誌』創刊号を企画すると、外骨の要請に応じて「海軍兵学寮の建築」論文を寄稿した⁴⁹。執筆の経緯は、7月30日に外骨から「イツぞや御複写下さった海軍兵学寮の説明文御書きを願ひたい」という依頼状だが、事の発端は、かねて堀越が所蔵する海軍兵学寮の古写

44 前掲吉野『宮武外骨』、165頁。

45 大久保利謙『日本近代史学事始め』岩波書店、1996年、95～96頁。

46 宮武外骨「公私混合日記（二十五）」『公私月報』50号、1934年11月、8頁。

47 宮武外骨「宮城設計図三百余枚皇居造営事務局の書類」『公私月報』46号、1934年6月、4頁。

48 堀越の古写真蒐集と建築史研究の関係については、金行信輔他「江戸の建築・都市景観と写真史料」（『建築史学』35号、2000年9月）論文の註（六）に若干の示唆がある。

49 堀越三郎「海軍兵学寮の建築」宮武外骨編『明治文化研究会雑誌』創刊号、1937年、8～9頁。

真の複写を外骨に提供したことにある。堀越は、1929年刊行の自著『明治初期の洋風建築』の一節を下敷きに、兵学寮の古写真から兵学寮建造物の建築年代を緻密に考証した。堀越論文は、古写真を素材とした斬新な近代建築史研究というだけでなく、近年取沙汰され始めた建造物・風景古写真を素材とした写真史料論の嚆矢に位置する興味深い仕事と察せられる。

このようなかたちで外骨のアーカイブ事業は、戦前期建築史学の建築史料形成と建築史研究の一端に貢献していたのである。

ただし、堀越と外骨の交流は、常にアーカイブの利用者と提供者という固定された関係ではない。堀越は外骨の蒐集事業に気遣いをみせ、時に自身のコレクションから「横一尺ほどの古写真四十枚」を外骨に譲渡し、時に外骨の古写真についての公開情報の不備を指摘し、史料情報の更新を迫る役割も演じた⁵⁰。そこには、アーカイブの利用者（利用を通じてアーカイブの存在が確認／強化される面もあるが）であると同時に、史料の蓄積と公開・共有に資する構築者であるという役割の循環が見受けられるのである。

結びにかえて

外骨の古写真蒐集は、物理的な資料庫としての明治文庫と紙媒体の『公私月報』という二重のアーカイブを拠点とする、古写真アーカイブの形成事業の側面があった。蒐集写真群を「写真史料」と定義した外骨の構えは、この事業が期待する到達地点を示唆するものである。すなわち、堀越が文庫提供の古写真を典拠史料とした建築史論文を執筆したように、それらが史的考証や歴史叙述に結実することを期待する点で、「写真史料形成」の実践といえる。外骨自身は、1925年（大正14）3月7日起筆の雑記帳「あんニャもんニャ」の中で、今後の執筆予定として「とほね自叙伝」等とともに「写真史」を挙げている⁵¹。予定は実現しなかった。しかし、古写真アーカイブの写真史料を素材とした、「写真史」構想を温めていたのかも知れない。歴史学や写真史学では等閑視されがちだが、叙述や研究を立ち上げるには、事前に何がしかのアーカイブを経由する史料形成・史料調査というメタな「実践」の次元を要する。それゆえ、叙述・研究の前提条件を検討することになるアーカイブ史・蒐集史・史料形成史は、学説史としての学史とは異なる、社会史的なもう一つの学史の領域を構成するはずである⁵²。その意味で本稿は、アーカイブ史（蒐集史・写真史料形成史）としての写真史学史・史学研究の試みという一面も有している。

資料庫（紙媒体としてのそれも含めた）としての古写真アーカイブの役割で特筆されるのは、「民権家写真アーカイブ」という一群のカテゴリの発生と、戦前期日本建築史学界への貢献である。特に

50 宮武外骨「再勤せし芸妓小勝の写真」『公私月報』55号、1935年3月、6頁、宮武外骨「公私混合日記（六十七）」『公私月報』95号、1938年10月、8頁。

51 宮武外骨「あんニャもんニャ」、1925年3月7日起筆、東京大学明治新聞雑誌文庫蔵。

52 社会学者佐藤健二は学史を学説史のみならず調査史・方法史の水準で再構築すべきことを唱道する（たとえば、佐藤『社会調査史のリテラシー』新曜社、2011年）。筆者も佐藤の提議に学ぶものである。

後者は、資料庫として戦前期の建築史学界の研究に貢献した事実もさることながら、アーカイブと社会の接点を考える上で重要な点は、古写真アーカイブを介した建築史家堀越とのつながりが、古写真情報の補正・更新や新史料の入手を生み、そのことが、公開されるアーカイブ自体の質的向上・量的拡大に繋がっていく「循環」を生じさせていた点である。

外骨による古写真アーカイブは、こうした循環をつくりだす結節点の機能を有していた。すなわちアーカイブでの蓄積と公開は、古写真の社会的共有を出発点に、まずは同好者との史料情報の増補・更新や新史料の受贈をめぐるコミュニケーション・実践・つながりを創出した。ついで、それらを通じてアーカイブ自体の質的向上・量的拡大が実現される。さらに、バージョンアップしたアーカイブが適宜再公開（誌上公開）されることで、新たな古写真や史料情報が社会に再共有されていた。アーカイブを結節点とするこうしたプロセスで、古写真情報の社会的共有と更新およびそれに付随するコミュニケーションの再生産をうながす一連の「循環」が、アーカイブと社会の間で発生していたのである。

また古写真アーカイブの利用者が、以上のプロセスで史料情報の増補・更新や新史料の提供を担う点で、アーカイブ自体の蓄積・公開・共有を支えるアーカイブ構築者に転じうる役割の循環も見受けられた。その意味で、外骨が形成した古写真アーカイブは、利用者との共同構築物という性質も有するだろう。

外骨が構築・運営する古写真アーカイブは、古写真や史料情報を社会的に公開・共有する装置であるだけでなく、社会の側が保有する情報からアーカイブを再構築していく実践にも開かれていたわけである。そのことは、アーカイブが社会との交渉のプロセスで、史料・情報の社会的形成を可能にする結節点となりうることを示唆するだろう。

【Abstract】

Miyatake Gaikotsu and Old-Photographs Archives in Prewar Showa Period

Naoto OGAWA

From the viewpoint of historical sociology, this paper examines the formation of the Meiji Shinbun Zasshi Bunko at Tokyo Imperial University Faculty of Law as ‘old photographs archives’ in early Showa period and the social functions of the archives, such as the creation and the reproduction of new communications and relationships concerning old photographs among people using the Bunko as a node.

Particularly, I analyze the operation manager of the Bunko, Miyatake Gaikotsu’s activity to not only collect old photographs but also preserve and exhibit them. Similarly, I analyze the role of the public relations magazine ‘Koshi-Geppo’.

Although the issues on the relation between the archives and society have been overlooked in historical studies, this paper focuses on them.

The results suggest that Miyatake’s activity was a big project to build up the old photographs archives composed of two kinds of archives. One is the Meiji Shinbun Zasshi Bunko as the physical storage and preservation of records, the other is the public relations magazine ‘Koshi-Geppo’ as the storage and preservation of paper based media. To establish the old-photos archives was practice of the ‘formation of photograph historical materials’, including expectation that they would be used as the sources of historical studies or in historical descriptions.

For instance, in the prewar Japanese architectural history society, the members used the old photographs from Meiji Shinbun Zasshi Bunko for their studies. In short, Miyatake’s attempt prepared preconditions for a new method of study using photograph historical materials.

Additionally, the following points would be important to consider the relation between society and the archives. Accumulation and exhibition of the old-photos at the Bunko promoted

the social sharing of the information from old photos collected there, and also created new communications, practices and relationships among people who had the same interest through update of the old-photos information and donation of new materials. Therefore, the qualitative improvement and quantitative expansion of the archives in themselves have been realized. New information was re-shared in society by exhibiting such revised materials occasionally. Finally, a series of 'circulation' to guarantee the social sharing and update of old-photos information occurred between the archives and society.